

I 地形・歴史 Topography & History

1 地形等

市の南西部、阿武隈高地南部の東斜面に位置する。

東白川郡鮫川村を源流とする鮫川が支流の入遠野川を根岸地内で合流し、南東に流下し勿来地区に流入している。北に鶴石山、東に湯ノ岳を控えて、変化に富んだ地形となっている。中小河川が貫流しているが平坦地は少なく、大部分を山林が占めている。

標高は海拔 80～200mで、上遠野付近の気候は海岸低地とほとんど変わりはないが、入遠野はやや高原性を呈する。

周囲の山間緑地や鮫川、入遠野川等の清流など豊かな自然環境に恵まれており、アユ、イワナ、ヤマメの溪流釣りもでき、ゲンジボタル、カジカガエル、カワガラス等の生息地にもなっている。

交通体系、歴史的な背景から勿来、常磐地区との交流が顕著である。地区内の人口は約 6,700 人で市全体の約 2%を占めているが、社会減傾向が続いており、高齢化比率も市の平均を上回っている。

2 歴史

鎌倉時代「菊田荘」は、下野国の守護小山氏の所領であった。小山氏の一族藤井氏は菊田荘上遠野郷(当地区)に本拠を置き、足利方の有力な一員であった。藤井氏は後に上遠野氏を称した。

室町時代末期、岩城氏の勢力拡大に伴い、上遠野氏はその支配下に入り、岩城氏の家臣団の一員となった。慶長 7 年(1602)徳川家康は、磐城領 10 万石を鳥居忠政に与えたが、このとき、菊田郡上遠野郷 10 ヶ村は幕府領とし、駒木根右近が代官職を務め支配した。その後元和 8 年(1622)上遠野(深山田・上遠野・根岸・滝・入遠野の一部)は棚倉藩、入遠野(根本・大平・入遠野の一部)は幕領となった。

古くから上遠野郷では紙漉が行われており、寛保 3 年(1743)棚倉藩は紙会所を上遠野に設けた。

明治 17 年(1884)上遠野で農民騒擾事件が起こった。これは、借金返済に困った農民達 300 人が、上遠野村と根岸村の債主に押しかけた事件である(困民党事件)。

(参考文献:「いわき市史」、「新しいいわきの歴史」)

※行政区域の変遷

